

感想文でつづる第 74 回兵庫大会～はじめてのハイブリッド＆コンパクト大会

大会委員長・本庄豊

●感想文もまた第一級の歴史的な資料

2日間の大会に420人が参加

歴史教育者協議会第74回全国大会は、8月10日（木）～11日（金・祝日）2日間の日程で、兵庫県西宮市関西学院大学西宮聖和キャンパスで開催されました（後援・西宮市、西宮市教育委員会、関西学院大学）。事前申し込み者は375人、最終的な参加者は420人でした。今年の大会は対面とオンラインを組み合わせた、初めてのハイブリッド形式での開催となりました。ハイブリッド大会の準備と運営を支えていただいた、岩本賢治さんをはじめとする兵庫歴教協の皆さん、分科会世話人の皆さんにお礼申し上げます。炎天下、熱中症に気をつけながら、学生スタッフも頑張りました。

オンライン参加は相対的には若手が多かったのですが、逆に熱中症などの心配から自宅で参加せざるを得ない高齢の会員もいました。ハイブリッド大会について寄せられた感想をいくつか紹介します。（一部のみを抜粋）

「全国大会、お疲れ様でした。私はオンライン参加でした。私の分科会『平和教育』はハイブリットの不具合はなく、おおいに刺激を受けました。平井さんと斉加さんの懇談講演も臨場感があり満足しました。ハイブリッドはお金と神経とハプニングでお疲れになったでしょう。」

「全国大会に兵庫まで行く時間と体力はなかったのですが、今回、平井さんと斉加さんの



お話をどうしても聴きたくて、オンラインで全体会のみ参加させていただきました。全国大会には勿論対面で参加するのがベストなのですが、今回の私のように都合がつけにくくても、一部でもオンラインで参加できるのは素晴らしいと思います。オンラインがきっかけでまた、現地に足を運ぶ人もいるのでは。最初、現地とオンラインで参加費が同じなのはどうかとも思いましたが、むしろオンラインの方が手間がかかるのだから当然だと思いました。ただ、当日斉加さんと平井さんの対談の時に正面から見たかったなと思いました。（左下からのカメラだったので斉加さんの表情や舞台全体の様子がわかりにくかったです）現地に行かずとも参加させていただき本当にありがとうございました。」

「オンラインで参加しました。全体会、分科会（中学校歴史）ともに、何の支障もなくPCを前に2日間たっぷり参加させていただきました。心配していたのは、分科会レポートの配信ですが、以前に別の集会で大量のレポ

ートを配信するために使用された大型メール便が開けなくて、散々苦勞したことがありましたが、今回のレポート配信は、操作も簡単、すべてのレポートを短時間で入手できました。これは受信側の便宜を考えた方法を用いられたのかと思っています。来年もハイブリッドで行われるようですが、レポートの配信は、ぜひこの方式でお願いしたい気持ちです。」

大会は「今後も持続可能」とするため「参加者はお客さんではなく主体的に運営にかかわっていただく」という観点を貫き、「スリムでコンパクトな大会」を目指しました。昨年に引き続き、午前中全体会、午後分科会、夜は「地域に学ぶ集い」とし、オプションの「現地見学」はすべて日帰りコースとしました。

全体会は大会委員長の本庄豊と峯岸由治現地実行委員長の歓迎の言葉から始まりました。本庄は「歴史的に見ること、それを授業実践として提示し、子どもと対話することを積み上げていきましょう」、峯岸現地実行委員長は「今大会が『新たな戦前』にさせない歴史教育・社会科教育実践創出の契機となるよう、全体会では、斎加尚代さんと平井美津子さんの対談を通して、教育とメディアに対する国家統制の現状を解明します」と述べました。なお兵庫歴教協からは20本のレポートがエントリーされました。加えて「大会終了後に実施される現地見学では、私たちが実際に歩き、目と耳で点検、確認してきたものです」と峯岸現地実行委員長が強調されたように、コンパクトではあっても文字通り兵庫歴教協の総

力を発揮された大会となりました。

大会のために、韓国から全国歴史教師の会長・朴來勲さん、中国から南京市金陵中学歴史グループ教育研究グループ長の孫凱さんがメッセージを寄せられました。歴教協全国大会が東アジアの歴史教育者たちとの連帯の中で開催されることの大きな意味について改めて感じさせられました。

山田朗歴教協委員長の基調提案ならびに、映画「教育と愛国」監督・斎加尚代さんと出演者・平井美津子さんの対談、各分科会、地域に学ぶ集いに寄せられた感想文の中から、今大会の様子がわかるものを選抜して紹介いたします。なお、本稿のタイトルを「感想文でつづる第74回兵庫大会」としたのは、歴教協創立者の一人である高橋礪一さんの名著『流行歌でつづる日本現代史』（1969年、新日本出版）にあやかったからです。感想文もまた第一級の歴史的な資料なのです。

「冷房がきつくて、高温対策のため軽装でしたのでつらかったです」という感想もたくさんいただきました。来年の全体会に生かしたいと思います。また、現地見学については『歴史地理教育』11月増刊号で報告がありますので、参照してください。

●軍拡と戦争の根底にある人権侵害 山田朗
歴教協委員長の基調提案「平和と民主主義を創造する一地域に根ざす人権尊重の社会科教育」の感想

▽関東大震災以降の内敵をつくる、攻撃する動きと力づくでの対外政策などの根底に人権



侵害がある。軍拡の連鎖のことなどを聞いて、戦争の足音が聞こえてくるようでした。

▽軍事費の増強は本当に必要なのか、国力ギリギリの日本の未来のために、予算を組む理由は何か、国の礎は人の命であり、豊かさを創るのは教育により人間の強さをつくり出すことではないかなどと問いながら、基調提案を聞きました。

▽子どもをあやつって戦争を進めていったというお話が、とても興味深かった。子どもにどう接していくか、どういう考え方を伝えていくかが大切だと思った。

▽現在がどのような状況に位置づけられるか、まさに戦争前夜だと思った。教育に対する攻撃は最終局面なのだと思う。それに対抗する力を教員が身につけなければならない。そのための一助にこの大会がなければならない。

▽現代の情勢を近代の歴史からの視点で見ると、混迷の時代が一転して「新たな戦前」として鮮明に見えてきた。真の平和の意味を考えさせられ、勉強になりました。

▽明らかに本当の意味での平和から遠ざかっている動きがみられるが、生徒たちは武力による平和は望んでいないし、兵になることも望んでもいない。だからこそ、政治の世界で

起こっていることをよく知ってもらい、そこから社会がどのように変化する可能性があるのか考えさせ、討論し、未来に希望を持てるような大人になってもらえる実践をしていきたい。

●聞きごたえのあるデュエット講演会 齊加尚代対談平井美津子「『新しい戦前』を回避するために―教育とメディアの意味を問い続けて―」の感想

▽平井さんが実際の教員であり、リアルに闘っていることが伝わり、心を動かされた。齊加さんも闘っているので勇気をいただいた。

▽これを聞くために早起きして来た。

▽記念講演の概念が変わりました。とても聞きやすく、対談形式、面白かったです。お二人の生き方に涙が出ました。社会のあり方が映し出されました。

▽聞いてスカッとする講演でした。気持ちが良かったです。自分自身、現役時代、抑圧された後半もって考えがせばまってゆき、自由がうばわれた気持ちで取り組んでいたのも、平井さんや齊加さんの信念や考え方には、そうだ！と思うし、拍手です。

▽「教育と愛国」が外国の人にも理解され、「教育は歴史的事実を教えて、子どもたちに考えさせることであり、政治に左右されてはいけない」ということは大事。インドネシア、アルゼンチン等、グローバルの話で身が開かされました。

▽「教育と愛国」出演者の一人、平井さんの経験を聞いたこと、大きな収穫でした。大阪

維新の会の教育委員会に対する介入があったとき、その不条理がどれだけ平井さんを苦しめたかと思うと、怒りだけではなく、デマを作り出す、SNS利用の怖さを感じます。公教育の中にある人権の学びは普遍的にあり、一時代の利害感情で恣意的に曲げられることがあってはならない。歴教協で学ぶ私たちには当たり前でも、実際に中高生に問いかけると、「自分の見方が正しい」の一点張りの生徒もいる。歴史の中から人間が社会に振り回されるさま、だまされやすくなる人間の現状を教えること、今日でもそれは起こりうることでと再度生徒に伝えたいです。

▽お二人で90分、聞きごたえのあるデュエット講演会でした。女性二人が協力すると、本当に素晴らしい内容のお話ができるのですね。対話、議論が大切なことをおっしゃっていました。同感です。

▽“論争を避ける”を超えて、現在は“論争自体を知らない”という雰囲気新しい職員には感じます。中央統制の強まる昨今の教育行政そのものに危機感を持って、本日おっしゃっていた「ありのままの事実にもとづいた歴史教育にどう取り組んでいくか、課題を立てていかねばならないと感じました。

▽私はこの映画を見たことがありませんでしたが、現在の政治が教育にかかる圧力に大変怒りを感じます。今日のお話を拝聴して、さらに怒りを感じるとともに、教員不足の原因は、実は政治がつくり出しているのかもしれないと感じました。そんな圧力に屈しない平



井さんには勇気をいただきましたと思っています。自分の学校だったら、そんな授業はやめてくださいと言われてしまいそうな気もしますが、教育は何のためにやるべきなのか、何を考えさせるべきなのか、非常に本質的なことについて改めて考えるきっかけになりました。

●「地域に学ぶ集い」の感想(一部のみを抜粋)

01 古文書から見える地域産業の歴史―近世上方酒造業を事例に(講師:大浦和也)

▽灘の清酒造りの歴史から、近世の産業の仕組みや様子がリアルに伝わってきて、あっという間の90分であった。特に西宮から江戸(消費地)へ清酒を輸送する樽廻船と、江戸で清酒を販売する下り酒問屋のお話は興味深かった。またペリー来航という地政学的要因が江戸での清酒販売に与えた影響や、景気分析に関する古文書の解説など歴史学の専門性に触れることができ、満足であった。

06 地域の戦争遺跡を学び、発信する高校生(講師:稲次寛)

▽高校生が戦争遺跡の調査を通して成長する姿を実感できてすばらしかった。今後、活動を発展させる上で、どんな課題があるかを明確にしていく必要があるのではないだろうか。



まだわかっていない部分を、ぜひ解明して欲しい。

08 阪神・淡路大震災から得た教訓—自分事として考える(講師:長谷川元気)

▽新指導要領で現場に降ってきた感のある、主体的学びの実践が、阪神淡路大震災からの立ち直りという非常時のなかで京都の主体的取り組みが生徒の主体的意欲とつながり、実践されていたことに驚きました。生徒の主体的学びは教師の主体的活動に基づくということを、改めて実感しました。

11 日韓交流—2025年から韓国の歴史教育はどうなるのか(講師:李慶勲)

▽李さんがゆっくりと丁寧に韓国語を話してくださったので、大体聞き取ることができました。日本も韓国も社会科の教育でよく似た動きがあることがわかりました。

●各分科会の感想(一部のみを抜粋)

1 地域の掘りおこし

▽11本ものレポートをしっかりと時間を区切って報告・質疑をしていたように、世話人の方たちの努力が進められて、良かったと思う。

3 日本近現代

▽戦争を知るおじいさん、おばあさんを知らない子どもたちが現在教室に増えているので、

以前は当たり前だった戦争体験の聞き取りが難しくなっている。その時に大切になってくるのが史料だと思うので、本日報告は授業を構成していくうえで大変参考になりました。

4 世界

▽良知永行(静岡)実践「この日本の『戦後』のスタートはこれでよかったのか?」について、憲法やマイノリティの視点を大切にしていることに共感できた。生徒の関心を高める問いや、琉球新報などの教材や黒板の使い方も素晴らしいと思った。共通テストの実施については、どれだけ授業が影響を受けるのが今後心配される。

12 小学校6年生

▽初めて参加しましたが、ただ教科書を教えるのではなく、子どもたちがどんなことを考えているかを大事にしないといけないと感じました。また参加させていただきたいです。

16 中学校公民

▽平井美津子さんの報告では朝鮮学校での実践や講話の様子について聴くことができ、私自身も研究テーマをもって、実践していきたいと考えました。また国領さんの報告では、公民の一单元としてブラジル移民について、地域に根ざした内容を知ることができ、私も地域教材の開拓を行っていきたいと考えます。本庄さんの発表では、ウクライナ問題を日中戦争と比較していてわかりやすかったです。

多くのレポート、そして感想がありますが、ごく一部の紹介ですみません! 兵庫に集まったみなさん、ありがとうございました。